

# セカンドパーティ・オピニオン 味の素株式会社サステナビリティ・ リンク・ファイナンス・フレームワーク

## 評価概要

サステナリティクスは、味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークがサステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020（SLBP）及びサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023（SLLP）に適合しているとの意見を表明します。

- 重要業績評価指標（KPIs）の選定** 味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークは、（1）スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率及び（2）スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率の 2 つの KPIs を選定しています（表 1 参照）。サステナリティクスは、重要性（マテリアリティ）及び関連性、適用対象範囲、外部により定義された明確かつ一貫した方法論、ベンチマーク可能性を踏まえ、これらの KPIs を Very Strong と評価します。
- サステナビリティ・パフォーマンス・ターゲット（SPTs）の設定** サステナリティクスは、設定されている SPTs が味の素株式会社のサステナビリティ戦略と整合していると考えます。さらに、サステナリティクスは、過去のパフォーマンス実績、同業他社との比較、科学的根拠のある軌道との整合性を踏まえ、SPT 1 を Highly Ambitious、SPT 2 を Ambitious と評価します。
- 債券及びローンの特性** 味の素株式会社は、サステナビリティ・リンク・ボンド及びローンの財務的特性を、SPTs の達成状況に連動させます。財務的特性の調整としては、利率のステップアップ、寄付、排出権の購入があり、（1）目標達成状況を確認する日までに SPTs のいずれかが未達である場合、又は（2）関連するファイナンスについての法的書類で定められる形で適時に SPTs に対する KPI パフォーマンスの検証が提供及び開示されなかった場合、に実施されます。
- レポートニング** 味の素株式会社は、KPIs の進捗状況について年次で同社ウェブサイトにて報告することを約束しています。また、味の素株式会社は、KPI に影響し得るサステナビリティ戦略やアクションプランの実行状況における変化等の関連情報を開示することも約束しています。レポートニングに関する約束は、SLBP 及び SLLP に適合しています。
- 検証** 味の素株式会社は、少なくとも年次で、各 SPT に対する KPI パフォーマンスについて限定的保証を外部から得ることを約束しています。検証に関する約束は、SLBP 及び SLLP に適合しています。

評価日 2023 年 5 月 16 日  
発行体所在地 東京（日本）

SPTs は、以下の SDGs に貢献します。



## KPIs 及び SPTs の概要

| KPI                             | ベースライン  | KPI の妥当性    | SPT                                               | SPT の野心性         |
|---------------------------------|---------|-------------|---------------------------------------------------|------------------|
| KPI 1：スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率（％）  | 2018 年度 | Very Strong | SPT 1：2030 年度までにスコープ 1・2（排出絶対量）を 50%削減（対 2018 年度） | Highly Ambitious |
| KPI 2：スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率（％） | 2018 年度 | Very Strong | SPT 2：2030 年度までにスコープ 3（排出量原単位）を 24%削減（対 2018 年度）  | Ambitious        |

## 目次

|                                                                                                                 |    |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 評価概要 .....                                                                                                      | 1  |
| 目次 .....                                                                                                        | 2  |
| 業務範囲及び限定 .....                                                                                                  | 3  |
| はじめに .....                                                                                                      | 5  |
| サステナリティक्सのオピニオン .....                                                                                          | 6  |
| セクション1：味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークとサステナビリティ・リンク・ボンド原則及びサステナビリティ・リンク・ローン原則との適合性に関するサステナリティックスのオピニオン ..... | 6  |
| セクション2：味の素グループのサステナビリティ戦略の評価 .....                                                                              | 11 |
| セクション3：SPTsによるインパクト .....                                                                                       | 14 |
| 結論 .....                                                                                                        | 15 |
| 参考資料1：サステナビリティ・リンク・ボンド－外部機関レビューフォーム .....                                                                       | 16 |
| 免責事項 .....                                                                                                      | 21 |
| サステナリティックス（モーニングスター・カンパニー） .....                                                                                | 22 |

## 業務範囲及び限定

味の素株式会社（以下、「味の素㈱」あるいは「同社」）は、2023 年 5 月付の味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワーク（以下、「本フレームワーク」）についてのレビュー並びにサステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020（SLBP）<sup>1</sup>及びサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023（SLLP）<sup>2</sup>との適合性に関するオピニオン提供をサステイナリティクスに依頼しました。

サステイナリティクスのセカンドパーティ・オピニオンは、本フレームワークと国際資本市場協会（ICMA）によるサステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020、ローン市場協会（LMA）、アジア太平洋ローン市場協会（APLMA）及びローンシンジケーション&トレーディング協会（LSTA）によるサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023 への適合性についてのサステイナリティクスの独立した見解を反映しています<sup>3</sup>。

委託契約の一環として、本フレームワークにおけるレポートや検証プロセスの側面に加えて、事業プロセスや SPTs によるサステナビリティへのインパクトを理解するため、サステイナリティクスは味の素㈱の経営チームメンバーと情報交換を実施しました。同社の担当者は、以下について確認を行っています。

- (1) 提供された情報の完全性、正確性又は最新性の確保は味の素㈱の単独責任と理解していること
- (2) 全ての関連情報をサステイナリティクスに提供していること
- (3) 提供された重要な情報が適時に適切に開示されていること

サステイナリティクスは、関連する公表文書及び社内文書の確認も行いました。本意見書は、本フレームワークに対するサステイナリティクスのオピニオンであり、本フレームワークと併せてご覧ください<sup>4</sup>。現在のセカンドパーティ・オピニオンの更新は、サステイナリティクスと味の素㈱との間で合意される委託契約の条件に従って行われます。

サステイナリティクスのセカンドパーティ・オピニオンは、本フレームワークのマーケット・プラクティスへの適合性を反映していますが、適合性の保証や将来の関連するマーケット・プラクティスへの適合性の保証を与えるものではありません。更に、サステイナリティクスのセカンドパーティ・オピニオンは、各 KPI について期待される SPT について言及していますが、KPI パフォーマンスについての測定は行っていません<sup>5</sup>。KPI の測定と報告は、本フレームワークの所有者の責任です。今回のセカンドパーティ・オピニオンにおいてサステイナリティクスが提供するいかなる情報も、本セカンドパーティ・オピニオン作成のために同社がサステイナリティクスへ提供した事実や関連情報・状況の真実性、信頼性、完全性に対する賛否に係わず、声明、表明、保証、主張とはみなされません<sup>6</sup>。

本セカンドパーティ・オピニオンは、その作成の対象となるフレームワークと整合し、かつ同書内に記載された KPI パフォーマンスを計測する方法論と整合するボンド発行及びローン実行に対して、24 ヶ月又は以下のいずれかが発生するまで有効です。

- (1) 目標を設定するために使われた外部ベンチマーク<sup>6</sup>における重大な変更
- (2) SPTs の達成または KPIs のマテリアリティに影響する重大な企業の行動（重大な M&A や事業活動の変更など）

<sup>1</sup> 国際資本市場協会（ICMA）によるサステナビリティ・リンク・ボンド原則は、こちらより閲覧頂けます。:

<https://www.icmagroup.org/assets/documents/Regulatory/Green-Bonds/June-2020/Sustainability-Linked-Bond-Principles-June-2020-100620.pdf>

<sup>2</sup> ローン市場協会（LMA）、アジア太平洋ローン市場協会（APLMA）及びローンシンジケーション&トレーディング協会（LSTA）によるサステナビリティ・リンク・ローン・原則は、こちらより閲覧頂けます。: <https://www.lsta.org/content/sustainability-linked-loan-principles-sllp/>

<sup>3</sup> 多様な顧客に対し複数の業務を提供している場合、客観的な調査がサステイナリティクスの基礎となり、アナリストの独立性の確保が客観的で実行可能な調査のために最も重要となります。そのため、サステイナリティクスでは、堅固なコンフリクト・マネジメント・フレームワークを導入しており、特に、アナリストの独立性、プロセスの一貫性、コマーシャルチームとリサーチ（及びエンゲージメント）チームの構造的分離、データ保護並びにシステム分離の必要性に対応しています。もう一つの重要な点として、アナリストの報酬は、特定の商業的成果に直接結びついておりません。サステイナリティクスの特徴は、完全性と透明性です。

<sup>4</sup> 「味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワーク」は、同社のウェブサイトにて閲覧できます。:  
<https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/csr/finance/index.html>

<sup>5</sup> 本フレームワークに基づき発行される金融商品の財務的特性は、フレームワークに含まれる各 KPI に対応する SPT の達成と連動するという解釈に基づき、サステイナリティクスはオピニオンを提供しています。

<sup>6</sup> ベンチマークは、科学的根拠に基づくベンチマークを示します。

本件に関する問い合わせについては、下記の Sustainable Finance Solutions プロジェクト担当チームまでご連絡ください。

**Kosuke Kanematsu (Tokyo)**

Project Manager  
kosuke.kanematsu@sustainalytics.com  
(+81) 3 4571 2277

**Sumaiya Waheed (Mumbai)**

Project Support  
sumaiya.waheed@morningstar.com

**Makiko Yamamoto (Tokyo)**

Client Relations  
susfinance.japan@sustainalytics.com  
(+81) 3 4520 2191

**Shigeru Ogawa (Tokyo)**

Project Support  
shigeru.ogawa@sustainalytics.com

**Yukie Osari (Tokyo)**

Project Support  
yukie.osari@sustainalytics.com

## はじめに

味の素株式会社（以下、「味の素㈱」あるいは「同社」）は、1909年に設立された食品企業であり、日本の東京に本社に置いています。味の素㈱は、アミノ酸のリーディングカンパニーとして、（1）調味料・食品、（2）冷凍食品、（3）ヘルスケア等の三つの事業を世界で展開しています。2023年3月31日時点の連結ベースで、同社の年間売上高は約1兆3,600億円であり、約34,000人の従業員を擁しています。

同社は、サステナビリティ・リンク・ボンド及びローンによる資金調達を企図しており、その財務的特性である利率、寄付又は排出権購入は、重要業績評価指標（KPIs）に関するサステナビリティ・パフォーマンス・ターゲット（SPTs）の達成状況に連動します。KPIは（1）スコープ1・2のGHG排出絶対量での削減率、及び（2）スコープ3のGHG排出量原単位での削減率、の二つです。

味の素㈱は、サステナリティクスとの間で、本フレームワークとSLBP及びSLLPとの適合性について、オピニオンを提供する委託契約を締結しています。本フレームワークは、別のドキュメントにて開示されています<sup>7</sup>。

以下の表1及び2は、同社が定義したKPIs及びSPTsを示しています。

表1：KPIs

| KPI                         | 概要                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| KPI 1：スコープ1・2のGHG排出量削減率（%）  | <p>当該KPIは、2022年3月31日時点での味の素㈱及び同社の「環境規程」に基づく「味の素グループ環境マネジメント」の対象となるグループ各社における、スコープ1及び2のGHG排出絶対量の削減率と定義されます。</p> <p>スコープ1は、燃料の燃焼、産業プロセス、車両の使用等、同社が管轄する排出源からの直接的な排出量です。スコープ2は、購入した電力、熱、蒸気の消費による間接的な排出量です。</p> <p>スコープ1及び2は、二酸化炭素換算重量（tCO<sub>2</sub>e）で測定され、GHGプロトコルの「事業者の排出量算定及び報告に関する標準」と年次で公表される国際エネルギー機関（IEA）のCO<sub>2</sub>排出係数に基づいて計算されます<sup>8,9</sup>。</p>                                      |
| KPI 2：スコープ3のGHG排出量原単位削減率（%） | <p>当該KPIは、スコープ3のGHG排出量原単位の削減率と定義されます。具体的には、KPIは、スコープ3（カテゴリー11の排出量を除く）のGHG排出絶対量（tCO<sub>2</sub>e）を、同年の生産量（トン）で割ることで計算されます。</p> <p>KPIの範囲には、2022年3月31日時点での味の素㈱及び同社の「環境規程」に基づく「味の素グループ環境マネジメント」の対象となるグループ各社における、バリューチェーン全体に起因するスコープ3排出量のうちカテゴリー11（販売した製品の使用）を除いた全カテゴリーを含みます。</p> <p>KPIは、GHGプロトコルの「事業者のバリューチェーン（スコープ3）における排出量算定及び報告に関する標準」及び年次で公表されるIEAのCO<sub>2</sub>排出係数に基づいて計算されます<sup>10</sup>。</p> |

<sup>7</sup> 「味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワーク」は、同社ウェブサイトより閲覧できます。:

<https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/csr/finance/index.html>

<sup>8</sup> GHGプロトコル、「A Corporate Accounting and Reporting Standard revised edition（英文）」:

<https://ghgprotocol.org/sites/default/files/standards/ghg-protocol-revised.pdf>

<sup>9</sup> 国際エネルギー機関（IEA）、「Emission Factors 2022（英文）」（2022）:

<https://www.iea.org/data-and-statistics/data-product/emissions-factors-2022>

<sup>10</sup> GHGプロトコル、「スコープ3排出量の算定技術ガイダンス 企業のバリューチェーン（スコープ3）算定・報告基準の補足」:

[https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply\\_chain/gvc/files/\(J\)-calculation\\_guidance.pdf](https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply_chain/gvc/files/(J)-calculation_guidance.pdf)

表 2：SPTs と過去のパフォーマンス実績<sup>11</sup>

| KPI                                        | 2018* | 2019  | 2020  | 2021  | 2022             | SPT 2023 | SPT 2024 | SPT 2025 | SPT 2026 | SPT 2027 | SPT 2028 | SPT 2029 | SPT 2030 |
|--------------------------------------------|-------|-------|-------|-------|------------------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| KPI 1：2018 年度比でのスコープ 1・2 の GHG 排出量削減率 (%)  | -     | -9%   | -11%  | -18%  | NA <sup>12</sup> | -25%     | -29%     | -32%     | -36%     | -39%     | -43%     | -46%     | -50%     |
| KPI 2：2018 年度比でのスコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率 (%) | -     | +2.7% | +6.2% | +0.9% | NA <sup>13</sup> | -5%      | -7%      | -10%     | -13%     | -16%     | -18%     | -21%     | -24%     |

\*ペースライン

## サステナリティクスのオピニオン

### セクション 1：味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークとサステナビリティ・リンク・ボンド原則及びサステナビリティ・リンク・ローン原則との適合性に関するサステナリティクスのオピニオン

サステナリティクスは、味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークがサステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020 及びサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023 に適合しているとの意見を表明します。



#### 重要業績評価指標（KPIs）の選定

##### KPIs の関連性及び重要性（マテリアリティ）

重要性（マテリアリティ）及び関連性の評価において、サステナリティクスは、（1）味の素㈱のビジネスが環境や社会課題に与える重要な影響に関する指標であるか、及び（2）KPI の適用対象範囲はどれくらいか、という点を考慮します。

サステナリティクスは、今回の関連性、マテリアリティ、適用対象範囲の評価について、KPI 1（スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率 (%)）と KPI 2（スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率 (%)）の対象となる GHG 排出量の合算値に基づくアプローチをとります。理由としては、2 つの KPI は、両方合わせて同社全体の GHG 排出量に関する課題に対応するからです。

サステナリティクスは、以下の要素を考慮し、KPI 1 及び KPI 2 はマテリアリティ及び関連性が高い指標であると考えます。：

- サステナリティクスの ESG リスクレーティングは、「自社事業活動における炭素排出」を味の素㈱の重要な ESG 課題（Material ESG Issue：MEI）として特定しています<sup>14</sup>。また、サステナリティクスの食品業界に関する ESG リスクレーティングレポートでは、グローバルな食品事業活動からの GHG 排出を気候変動リスクとして特定しています<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> KPI 2 において、2023 年 7 月時点で、過去のパフォーマンス実績（2019-2021 年）と SPT 2023-2029 の数値が修正されました。

<sup>12</sup> 味の素㈱にとって 2022 年度末は 2023 年 3 月 31 日であるため、現状 2022 年度の認証済みデータはありません。

<sup>13</sup> 同上

<sup>14</sup> サステナリティクスによる MEI「自社事業活動における炭素排出」は、自社の事業運営におけるエネルギー使用及び GHG 排出量（スコープ 1 と 2）のリスク管理に関する内容です。また、GHG 排出量（スコープ 3）の一部も関連しています。

<sup>15</sup> サステナリティクスの食品に関する業界レポート（2022）。

- サステナビリティ会計基準審議会（SASB）は、食品・飲料業界に属する加工食品セクターにおいて、エネルギーマネジメントを関連課題として特定しています<sup>16</sup>。SASB は、生産と流通における省エネルギーは、エネルギーコストの変動による影響の軽減や、企業に起因する直接及び間接的な GHG 排出量を抑制すると述べています。
- 2022 年度に実施したマテリアリティ分析として、味の素(株)は気候変動への適応とその緩和をマテリアリティ項目として特定しています<sup>17</sup>。更に、「2050 年までのネットゼロ達成」という、KPI の根拠となる GHG 排出量削減目標は、スコープ 1、2、3 を含むカーボンフットプリント全体に取り組むという同社の包括的な気候目標を示しています。

選定されている KPIs は、スコープ 1、2、3 の GHG 排出量をカバーしており、2021 年度における同社事業全体の排出量の 89%に相当します。KPI 1 は、スコープ 1 及び 2 をカバーしており、2021 年度の同社の GHG 総排出量（スコープ 1、2、3）の 13%を占めます。KPI 2 は、バリューチェーンの上流及び下流のスコープ 3 の排出量（カテゴリ 11 を除く）をカバーしており、2021 年度のスコープ 3 における排出量の約 87%及び同社の GHG 総排出量の 76%を占めています。以上のように、KPI 1 及び KPI 2 は、両方合わせると同社の GHG 総排出量の大部分に対応しているため、適用対象範囲が広いと言えます。

サステナリティクスは、選定された KPIs の適用対象範囲は広いと考え、自社の直接的な管轄範囲を越えて排出量や環境パフォーマンスに関与しようとする味の素(株)の取り組みを肯定的に評価します。

### KPI の特性

KPIs の特性の評価において、サステナリティクスは、（1）明確かつ一貫した方法論を用いているか、（2）外部に認識された定義に則っているか、（3）当該 KPI は重要な環境や社会課題に関する発行体又は借り手のパフォーマンスを直接的に測定するものか、（4）用いた方法論は外部の関連ベンチマークにより参照・比較が可能か（該当する場合）、について考慮します<sup>18</sup>。

味の素(株)による KPI 1 及び KPI 2 の計測に関する定義と方法論は、明確であり、かつスコープ 1、2、3 に関するこれまでの開示方法と一貫していると、サステナリティクスは考えます。KPI 1<sup>19</sup>及び KPI 2<sup>20</sup> は、GHG プロトコルの事業者の報告基準及び年次で公表される IEA の CO<sub>2</sub> 排出係数に基づいています。また、両方の KPI とも、Science Based Target イニシアティブ（SBTi）等によって定義された GHG 排出量削減軌道に対するベンチマークが可能です。サステナリティクスは、GHG 排出量という重要な課題に対する味の素(株)の環境面でのパフォーマンスと KPI 1 及び KPI 2 が直接的に連動していると考えます。

### 総合評価

サステナリティクスは、（1）味の素(株)の気候関連パフォーマンスを直接的に測定するものであり、かつ重要な環境課題に関連していること、（2）合算値で適用対象範囲が広いこと、（3）外部の参照情報と整合的な明確かつ一貫した方法論を用いていること、（4）科学的根拠のある GHG 排出量削減軌道に対するベンチマークが可能であることから、KPI 1 及び KPI 2 を Very Strong と評価します。

| KPI                                | KPI の妥当性    |          |        |             |
|------------------------------------|-------------|----------|--------|-------------|
| KPI 1 : スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率 (%)  | Not Aligned | Adequate | Strong | Very strong |
| KPI 2 : スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率 (%) | Not Aligned | Adequate | Strong | Very strong |

<sup>16</sup> サステナビリティ会計基準審議会（SASB）、「Materiality Finder – 加工食品」:

<https://www.sasb.org/standards/materiality-finder/find/?lang=ja-jp&industry%5B0%5D=FB-PF>

<sup>17</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」(2022):

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>18</sup> 外部のベンチマークは、生態系システムの境界との整合性に関するガイダンスを提供するものです。この基準は、社会課題に関する KPI や文脈上ベンチマークが利用できない分野には適用されません。

<sup>19</sup> GHG プロトコル、「A Corporate Accounting and Reporting Standard revised edition（英文）」(2004):

<https://ghgprotocol.org/sites/default/files/standards/ghg-protocol-revised.pdf>

<sup>20</sup> GHG プロトコル、「スコープ 3 排出量の算定技術ガイダンス 企業のバリューチェーン（スコープ 3）算定・報告基準の補足」:

[https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply\\_chain/gvc/files/\(J\)-calculation\\_guidance.pdf](https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply_chain/gvc/files/(J)-calculation_guidance.pdf)



## サステナビリティ・パフォーマンス・ターゲット（SPTs）の設定

### 味の素グループのサステナビリティ戦略との整合性

味の素(株)は、KPIs に対して以下の SPTs を設定しています。

- SPT 1：2030 年度までにスコープ 1・2（排出絶対量）を 50%削減（対 2018 年度）
- SPT 2：2030 年度までにスコープ 3（排出量原単位）を 24%削減（対 2018 年度）

サステナビリティクスは、SPTs が味の素(株)のサステナビリティ戦略と整合していると考えます。同サステナビリティ戦略の信頼性に係る分析については、セクション 2 を参照ください。

同社は、2022 年度のマテリアリティ評価において、GHG 排出量削減を重要なテーマとして特定し、排出量削減に向けた取り組みを実施しています。これらの取り組みには、製品ライフサイクル全体のカーボンニュートラル化、低排出係数の燃料利用、生産及び輸送時のエネルギー削減、気候関連財務情報開示タスクフォース（TCFD）の提言に沿った情報開示等の長期的な戦略が含まれています。SPTs は、2050 年度までにバリューチェーン全体でスコープ 1、2、3 の GHG 排出量をネットゼロにするという味の素グループの脱炭素化目標と整合しています。更に、味の素グループでは、2050 年度までに電力の再生可能エネルギーへの 100%転換を達成する目標を掲げています<sup>21</sup>。

### SPTs 達成のための戦略

#### SPT 1：2030 年度までにスコープ 1・2（排出絶対量）を 50%削減（対 2018 年度）

味の素(株)は、以下の施策を通じて当該 SPT を達成する予定です。

- 省エネルギー活動：同社では、エネルギー使用量の削減、ピーク時のエネルギー使用量の抑制、プロセスや設備の運転条件の最適化によって、省エネを推進する予定です。
- GHG 発生量の少ない燃料への転換：同社では、重油から天然ガス、石炭からバイオマスへの転換によって、GHG 排出量の削減を図る予定です。
- 再生可能エネルギー利用：同社は、再生可能エネルギー発電所（例：ブラジルでの水力発電、日本での風力発電）からの電力調達や再生可能エネルギー証書の購入によって、事業活動において再生可能エネルギーの活用を進める予定です。また同社は、いくつかの事業所において、オンサイトの太陽光発電設備を設置しています。
- エネルギー使用量を削減するプロセスの導入：同社では、高効率な冷凍・空調機器、LED 照明、インバーターモーター等の低エネルギー機器の搭載によって、省エネルギーを推進していく予定です。

#### SPT 2：2030 年度までにスコープ 3（排出量原単位）を 24%削減（対 2018 年度）

味の素(株)は、以下の施策を通じて当該 SPT を達成する予定です。

- 内部カーボンプライシング<sup>22</sup>：同社は、燃料転換や再生可能エネルギーの利用等の施策を推進するために、内部カーボンプライシング制度を活用する予定です。
- バイオサイクルの導入：同社は、「バイオサイクル」と呼ばれる循環型アミノ酸発酵プロセスによって生産される栄養豊富な副産物（コプロ）を肥料や飼料として使用する予定です。化学肥料を当該副産物

<sup>21</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>22</sup> TCFD によると、内部カーボンプライシングとは、企業が独自に策定した炭素排出の推定コストであり、収益機会やリスクの特定に役立つ計画ツールとして活用されます。具体的には、コスト削減のためのエネルギー効率化を推進したり、設備投資決定を方向付けるインセンティブとして機能することが期待されます。

TCFD、「Implementing the Recommendations of the Task Force on Climate-related Financial Disclosures（英文）」：

<https://assets.bbhub.io/company/sites/60/2020/10/FINAL-TCFD-Annex-Amended-121517.pdf>

に置き換えることで、化学肥料の生産に由来する GHG 排出量を削減し、持続可能な農業を支援することが期待されます。

- アンモニアのオンサイト生産：同社は、需要地に小規模なアンモニアプラントを設置することで、発酵原料の一つであるアンモニアのオンサイト生産に取り組む予定です。この施策により、輸送時に伴うコストや環境負荷を低減させていきます。
- 再生可能エネルギーへのシフト：「RE100」へのコミットメントの一環として、同社は、2050 年までに、自社事業活動における使用電力を、太陽光、風力、水力、バイオマス、地熱等による再生可能エネルギー使用に 100%転換させることを目標にしています<sup>23</sup>。これは、再生可能エネルギーの調達及び自家発電の組み合わせによって、達成していく予定です。
- フロン類の管理：同社は、2030 年度までに生産工程におけるクロロフルオロカーボン及びハイドロフルオロカーボンの全廃を目指しています。また同社は、設備を新設または更新する際には、自然冷媒または地球温暖化係数が 150 以下の冷媒に切り替えていく予定です。
- 物流における取り組み：同社は、他食品メーカーとの共同物流や鉄道及び船舶による輸送の利活用等の取り組みによって、持続可能で効率的な物流の構築を目指しています。さらに、同社は、日本の省エネ法に基づき、貨物輸送におけるエネルギー使用量原単位を年間 1%以上（5 年間平均ベース）削減していく予定です。
- 磁性材料の提供：同社は、消費電力の削減とそれに伴う CO<sub>2</sub> 排出量の削減に大きく貢献する新規磁性材料を開発しました。
- 家畜由来窒素排出量の削減：同社は、飼料中のアミノ酸バランスを調整することで、糞尿中の窒素化合物量を 20~30%削減することを目指しています。これによって、N<sub>2</sub>O やライフサイクル CO<sub>2</sub> の管理にも貢献することになります。

### 野心性、ベースライン、ベンチマーク

SPTs の野心性を判定するために、サステナリティクスは、（1）SPT が“Business-as-usual” (BAU) の軌道を越えているかどうか、（2）SPT が同業他社の目標と比べてどの水準にあるか、（3）SPT が科学的根拠のある軌道と比べてどの水準にあるか、を評価します<sup>24</sup>。

味の素(株)は、SBTi の認証を得ている基準年と同様に、SPTs の基準年も 2018 年度を選択しています。サステナリティクスは、市場の期待に沿うと、より近年を基準年とすることが望ましいと認識しています。一方で、味の素(株)が同社のサステナビリティ戦略及び SBTi が認証した目標との一貫性を確保しようと意図していることを、サステナリティクスは理解しています。

**SPT 1：**サステナリティクスは、当該 SPT の野心性を評価するために、過去のパフォーマンス実績、同業他社との比較、科学的根拠のある軌道との整合性に関する以下のベンチマークを活用しました。

- 味の素(株)のスコープ 1 及び 2 における排出絶対量は、2018 年度から 2021 年度の間に年平均で 5.9%減少しています。当該 SPT を達成するためには、2018 年のベースラインと比較して、同社は 2030 年までにスコープ 1 及び 2 における GHG 排出量を 50%削減する必要がある、その帰結として年平均で約 4.2%の削減ペースが想定されます。サステナリティクスは、SPT 達成に求められる全体的な削減トレンドを理解した上で、それには過去及び現在のパフォーマンス実績と同水準の改善が継続的に必要であることを理解しています。上記の内容を踏まえて、サステナリティクスは、当該 SPT が同社の過去のパフォーマンス実績から確認される減少傾向に沿ったものであると評価します。
- 食品産業及び加工食品・飲料産業における 8 社の同業他社との比較評価に基づく、SPT 1 は、同業他社が設定した目標よりも相対的に優れています。8 社の同業他社のうち、より野心的な目標を掲げているのは 1 社のみで、同社の目標は他 2 社が設定した目標と同様の水準であり、かつ他 5 社の目標を上回っています。したがって、サステナリティクスは、同社の SPT は同業他社のパフォーマンスを上回るものであると評価します。
- 世間で認知されている科学的根拠に基づく脱炭素化の軌道と比較すると、当該 SPT は総量同率削減アプローチを用いた SBTi の 1.5°Cシナリオと整合している、とサステナリティクスは考えます<sup>25</sup>。この削

<sup>23</sup> RE100、「About us（英文）」：<https://www.there100.org/about-us>

<sup>24</sup> エコシステムの境界と目標の整合性を示す文脈的なベンチマーク

<sup>25</sup> 総量同率削減アプローチは、企業が、1.5°Cまたは 2°Cを十分に下回る目標を満たすために必要になる世界の年間排出削減率と整合した削減目標を策定するための手法です。

減アプローチでは、GHG 排出絶対量において年平均で 4.2%以上の削減率が求められています<sup>26</sup>。サステイナリティクスは、味の素株式の SPT がこの最低限の削減率を満たしており、かつ 2020 年に「1.5℃シナリオ」に基づき SBTi に認証された同社の目標と整合していると認識しています。

**SPT 2:** サステイナリティクスは、当該 SPT の野心性を評価するために、過去のパフォーマンス実績、同業他社との比較、科学的根拠のある軌道との整合性に関する以下のベンチマークを活用しました。

- 味の素株式のスコープ 3 における排出量原単位は、2018 年度から 2021 年度の間に年平均で 0.3%増加しました。当該 SPT を達成するためには、同社は 2030 年度までにスコープ 3 における排出量原単位を 2018 年度比で 24%削減する必要があり、その帰結として年平均で約 2%の削減ペースが想定されます。上記の内容を踏まえて、サステイナリティクスは、当該 SPT の想定パフォーマンスは、同社の過去のパフォーマンス実績から確認されるトレンドを上回るものと評価します。
- 食品産業及び加工食品・飲料産業における 5 社の同業他社との比較評価に基づく、SPT 2 は、同業他社が設定した目標よりも相対的に優れています。5 社の同業他社のうち、より野心的な目標を掲げているのは 1 社のみで、同社の目標は他 1 社が設定した目標と同様の水準であり、かつ他 3 社の目標を上回っています。したがって、サステイナリティクスは、同社の SPT は同業他社のパフォーマンスを上回るものであると評価します。
- 世間で認知されている科学的根拠に基づく脱炭素化の軌道と比較すると、サステイナリティクスは、当該 SPT は 2020 年に「2℃ より十分低いシナリオ」に基づき SBTi に認証された味の素株式の目標と整合していると認識しています<sup>27</sup>。

## 総合評価

サステイナリティクスは、SPTs は味の素株式のサステナビリティ戦略と整合し、SPT 1 については、(1) 同社の過去のパフォーマンス実績と同水準の継続的な改善が示されていること、(2) 同業他社のパフォーマンスを上回っていること、(3) SBTi の 1.5℃シナリオに整合していることから、Highly Ambitious であると評価します。

サステイナリティクスは、SPT 2 については、(1) 同社の過去のパフォーマンス実績を上回っていること、(2) 同業他社のパフォーマンスを上回っていること、(3) SBTi の 2℃より十分低いシナリオに整合していることから、Ambitious であると評価します。

| SPT                                                   | SPT の野心性    |                      |           |                  |
|-------------------------------------------------------|-------------|----------------------|-----------|------------------|
| SPT 1: 2030 年度までにスコープ 1・2 (排出絶対量) を 50%削減 (対 2018 年度) | Not Aligned | Moderately Ambitious | Ambitious | Highly Ambitious |
| SPT 2: 2030 年度までにスコープ 3 (排出量原単位) を 24%削減 (対 2018 年度)  | Not Aligned | Moderately Ambitious | Ambitious | Highly Ambitious |



## 債券及びローンの特性

味の素株式は、本フレームワークに基づき、サステナビリティ・リンク・ボンドの発行及びサステナビリティ・リンク・ローンの借入を予定しています。サステナビリティ・リンク・ボンド及びローンの財務的特性は、本フレームワークで定義された SPTs の達成状況に連動します。サステイナリティクスは、(1) 目標達成状況を確認する日までに SPTs のいずれかが未達である場合、又は (2) 関連する資金調達についての法的書類で定められる形で適時に SPTs に対する KPI パフォーマンスの検証が提供及び開示されなかった場合に、財務的特性の調整として利率のステップアップ、寄付又は排出権の購入が行われる予定であることを理解しています。資金

<sup>26</sup> SBTi、「SBTi コーポレートマニュアル」:

[https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply\\_chain/gvc/files/tools/SBTi-Corporate-Manual\\_jp.pdf](https://www.env.go.jp/earth/ondanka/supply_chain/gvc/files/tools/SBTi-Corporate-Manual_jp.pdf)

<sup>27</sup> サステイナリティクスは、非公開情報として共有された味の素株式の SBTi 検証報告書によって、SPT 2 と SBTi の「2℃より十分低いシナリオ」との整合性について、確認しています。

調達に関する法的書類で定めた方法で、KPI を計測、観測又は開示ができなかった場合は、目標が未達である場合と同様に財務的特性の調整が実施されることを、サステナリティクスは認識しています。

味の素(株)は、bond発行又はローン実行の際に、三つの方法（利率のステップアップ、寄付又は排出権の購入）から一つを選択する予定です。排出権の購入を選択したにもかかわらず取引市場の状況により実施できなかった場合に限り、同社は事前に定めた排出権の購入額に相当する金額の寄付へと切り替える可能性があります。寄付は、公益社団法人、公益財団法人、国際機関、自治体認定 NPO 法人、地方自治体やそれに準じた組織に対して行われる予定です。同社は、味の素グループの社会貢献活動方針に基づいて、公益財団法人味の素ファンデーションをはじめとした寄付先を選びます。サステナリティクスは、寄付先が選定され次第、味の素(株)がその団体名を開示することを推奨します。また、サステナリティクスは、同社が寄付によって間接又は直接的に環境や社会へ悪影響を及ぼすことがないように努めることを確認しました。ローンについては、SPT が達成された場合、利率のステップダウンが適用される可能性があります。

同社は、各資金調達を行う際に作成する開示書類又は契約書類において、該当する限り、関連する KPIs、SPTs、ステップアップ/ステップダウンの利率幅、寄付額、排出権の購入額等のサステナビリティ・リンク・ファイナンスの特性を定める予定です。

サステナリティクスは、当該サステナビリティ・リンク・bond及びローンの関連する財務的特性がSLBP 及びSLLPに適合していることを認識しています。尚、サステナリティクスは、財務的ペナルティの度合いの妥当性に関する意見・評価は行いません。



## レポートニング

味の素(株)は、KPIs 及び SPTs の進捗状況を同社ウェブサイトにて年次で開示することを約束しています。更に、同社は、各 SPTs に対する KPIs の進捗状況、サステナビリティ戦略の策定や更新、アクションプランの実行状況等、投資家が SPTs の野心度をモニタリングするのに役立つ関連情報を開示することを約束しています。レポートニングに関する約束は、SLBP 及び SLLP に適合しています。



## 検証

同社は、独立した外部の検証機関から、KPI の進捗に関する限定的保証報告書を年次で取得することを約束しています。検証保証報告書は、目標達成状況を確認する日までに、同社ウェブサイトにて開示されます。検証に関する約束は、SLBP 及び SLLP に適合しています。

# セクション 2：味の素グループのサステナビリティ戦略の評価

## 味の素グループのサステナビリティ戦略の信頼性

味の素(株)及びグループ各社は、Ajinomoto Group Creating Shared Value (ASV) を経営の基本方針として事業を行っています<sup>28</sup>。ASV という表現は、creating shared value (CSV) に由来し、2014 年に中期経営計画において初めて表明されました<sup>29</sup>。ASV に基づき、同社は事業を通じて社会課題を解決し、社会価値と経済価値を共創することに取り組んでいます<sup>30</sup>。同社のビジョンとして、同社は 2030 年までに達成する二つのアウトカムを（1）10 億人の健康寿命を延伸すること及び（2）事業を成長させ

<sup>28</sup> 味の素株式会社、「ASV レポート（統合報告書）」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022\\_J\\_A4.pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022_J_A4.pdf)

<sup>29</sup> 味の素株式会社、「味の素グループ：ASV の歩み」：[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/esg/asv\\_history.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/esg/asv_history.html)

<sup>30</sup> 味の素株式会社、「ASV（Ajinomoto Group Creating Shared Value）経営」：<https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/aboutus/asv/>

## 味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワーク

ながら環境負荷を 50%削減することと定めています<sup>31</sup>。また、味の素は、2015 年度からマテリアリティ項目の抽出と整理を実施しています。現在は、気候変動への適応とその緩和、資源循環型社会実現への貢献、持続可能な原材料調達、水資源の保全等の 11 項目のマテリアリティがあり、2018 年度に特定されて以来年次で見直しが行われています<sup>32</sup>。

マテリアリティ項目に基づき環境に関するアウトカムを達成するために、スコープ 1、2、3 の排出量削減に加えて、同社は、2030 年度までにプラスチック廃棄物ゼロ化、2030 年度までに重点原材料の持続可能な調達比率 100%達成、2030 年度までに 2005 年度比で生産量原単位当たり水使用量を 80%削減等の目標を設定しています<sup>33</sup>。また、同社は、2020 年に RE100 に参画し、2050 年までに使用電力を 100%再生可能エネルギーから調達することを約束しました<sup>34</sup>。上記の環境に関する目標を達成するための主な施策として、同社は、温室効果ガス排出係数の低い燃料への転換、省エネ推進、プラスチック使用量削減とモノマテリアル包装資材への転換、事業活動を行う国や地域におけるリサイクルの社会実装、トレーサビリティの確立及び認証品購買の推進、生産プロセスの最適化等を実施しています<sup>35</sup>。

開示に関して、味の素は、TCFD に基づき、気候変動が事業に与える影響に関するシナリオ分析を 2018 年度から実施し、定量的にリスクを把握する体制を整えています<sup>36</sup>。また、SASB 及びグローバル・レポーティング・イニシアティブ（GRI）に基づく情報開示も実施しています<sup>37</sup>。更に、環境に対する取り組みや開示等が評価され、同社は、CDP から最高評価である「気候変動 A リスト」に 2020 年から 3 年連続で選定されています<sup>38</sup>。

サステナビリティに関するコミットメントを確実に実施するための体制として、2021 年 4 月に、同社は取締役会の下部機構としてのサステナビリティ諮問会議と、経営会議の下部機構としてのサステナビリティ委員会を設置しました<sup>39</sup>。サステナビリティ諮問会議は、社内・社外役員に加えてアカデミア、ミレニアル・Z 世代、新興国、ESG 投資家等様々な分野からの社外有識者で構成されており、取締役会から諮問を受けます。サステナビリティ委員会とサステナビリティ推進部は、同社のサステナビリティ戦略を策定し、CEO に直接報告を行います<sup>40</sup>。

サステナリティクスは、味の素は優れたサステナビリティ戦略を備えており、かつサステナビリティ・リンク・ボンド及びローンは味の素グループのサステナビリティ戦略を促進するものであると考えます。

## 環境及び社会的リスク管理

サステナリティクスは、味の素が定義する目標が環境改善効果を有すると認識しています。一方で、サステナリティクスは、SPTs の達成する過程には、（1）資源利用<sup>41</sup>、（2）土地利用及び生物多様性<sup>42</sup>、（3）サプライチェーンの人権及び人的資本<sup>43,44</sup>、（4）製品ガバナンス<sup>45</sup>等に関する環境及び社会的リスクが存在し得ることも認識しています。サステナリティクスは、潜在的なリスクを軽減するために同社が行っていることについて、以下のようにコメントします。

<sup>31</sup> 味の素株式会社、「ASV レポート（統合報告書）」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022\\_J\\_A4.pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022_J_A4.pdf)

<sup>32</sup> 同上

<sup>33</sup> 同上

<sup>34</sup> 味の素株式会社、「味の素グループ、国際的な環境イニシアティブ「RE100」に参画」（2020）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/presscenter/press/detail/2020\\_08\\_04.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/presscenter/press/detail/2020_08_04.html)

<sup>35</sup> 味の素株式会社、「ASV レポート（統合報告書）」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022\\_J\\_A4.pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/annual/main/014/teaserItems1/00/linkList/0/link/ASV%20Report%202022_J_A4.pdf)

<sup>36</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>37</sup> 味の素株式会社、「ESG・サステナビリティ」：<https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/>

<sup>38</sup> 味の素株式会社、「味の素は、CDP「気候変動 A リスト(最高評価)」に 3 年連続で選定」（2022）：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/presscenter/press/detail/2022\\_12\\_13.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/presscenter/press/detail/2022_12_13.html)

<sup>39</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティへのアプローチと体制」：<https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/sustainability.html>

<sup>40</sup> 同上

<sup>41</sup> サステナリティクスが重要な ESG 課題であるとする「資源利用」は、企業が生産において原材料（エネルギー及び石油系製品を除く）をいかに効率的かつ効果的に使用し、どのように関連するリスクを管理するかに焦点を当てています。

<sup>42</sup> サステナリティクスが重要な ESG 課題であるとする「土地利用及び生物多様性」は、サプライヤーの事業が土地、生態系、野生生物に与える影響を企業がどのように管理するかに焦点を当てています。

<sup>43</sup> サステナリティクスが重要な ESG 課題であるとする「人権・サプライチェーン」は、サプライチェーンにおける基本的人権に関する課題の管理に焦点を当てています。

<sup>44</sup> サステナリティクスが重要な ESG 課題であるとする「人的資本」は、熟練労働者の不足や、差別の禁止、労働時間、最低賃金等の労働関係のリスク管理に焦点を当てています。

<sup>45</sup> サステナリティクスが重要な ESG 課題であるとする「製品ガバナンス」は、企業が顧客に対する責任をどのように管理するかに焦点を当てています。品質管理システム、マーケティング手法、公正な請求、販売後の責任に重点を置いています。

## 味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワーク

- **資源利用**：同社は、サプライチェーンにおける人権と環境のデューデリジェンスを含む、責任ある原材料調達のためのプロセスを実施しています<sup>46</sup>。また、同社は、原材料の廃棄削減を目指し、製品ライフサイクル全体におけるフードロス及び発生廃棄物を 2050 年度までに 2018 年度比で 50%削減することを約束しています<sup>47</sup>。2021 年度の実績として、フードロス及び発生廃棄物は 2018 年度比で 23%削減されました。同社は、包装資材の使用における資源利用を最適化するため、ISO 18600 及び JIS Z 0130 を遵守しています<sup>48,49</sup>。
- **土地利用及び生物多様性**：同社は、事業活動において持続可能な管理施策を推進し、ISO 14001 に基づく環境マネジメントを実施しています<sup>50</sup>。同社は、持続可能な土地利用、生物多様性への影響、森林減少の抑制、アニマルウェルフェアを、2022 年度の重要な課題の具体例として特定しています<sup>51</sup>。同社は、家畜飼養の管理の改善及びサプライチェーンにおける動物との共生の実現を目的として、アニマルウェルフェアに関するグループポリシーを 2021 年に改定しました<sup>52</sup>。同社は、サプライヤー取引に関するグループポリシーを 2022 年に改定し、サプライヤーや取引先に対して自然環境及び生態系への悪影響を最小限に抑えることを求めています<sup>53</sup>。また、同社は、認証を受けた原材料の調達、トレーサビリティの確立、原料の有効利用に関する技術開発、動物由来原料に対する代替原料を推進しています。更に、同社は、アミノ酸生産時に発生する栄養豊富な副産物を有効利用することで持続可能な農業に貢献し、2030 年度までに重点原材料の持続可能な調達比率を 100%とすることを目指しています<sup>54</sup>。
- **サプライチェーンの人権及び人的資本**：味の素(株)は、従業員・サプライヤー・地域社会に関して、人権尊重に関するグループポリシー及び人権デューデリジェンスに関するプロセスを定めています<sup>55,56</sup>。同社の人権尊重に関するグループポリシーは、世界人権宣言、労働における基本原則及び権利に関する国際労働機関 (ILO) 宣言、国連グローバル・コンパクト、国連ビジネスと人権に関する指導原則を支持しています。同社の人財に関するグループポリシー<sup>57</sup>は、人種、民族、国籍、宗教、信条、出身地、性別、年齢、障がい、LGBT 等を理由とする差別を行わないことを強調しており、サプライヤー取引に関するグループポリシーでは、事業における児童労働及び強制労働を禁止しています<sup>58</sup>。
- **製品ガバナンス**：同社は、品質に関するグループポリシーに基づき、検査、評価、品質監査、説明会、アンケート等の品質管理に関する施策を実施し、製品及びサービスの品質を維持しています<sup>59,60</sup>。同社は、品質保証システム Ajinomoto system of quality assurance (ASQUA) を定め、ASQUA に基づき、製品のライフサイクルにおける保管及び輸送時の鮮度、温度、湿度等の品質管理を徹底しています<sup>61</sup>。ASQUA は、ISO 9001 を骨格に、Hazard Analysis and Critical Control Points (HACCP)、人・施設・プロセス・製品・手続に関する good manufacturing practices (GMP)、味の素グループの事業運営における品質維持を目的とした同社ポリシーを遵守する形で運用されています<sup>62,63</sup>。

<sup>46</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>47</sup> 同上

<sup>48</sup> 国際標準化機構 (ISO)、「ISO 18601:2013- Packaging and the environment - General requirements for the use of ISO standards in the field of packaging and the environment (英文)」：<https://www.iso.org/standard/55869.html>

<sup>49</sup> 公益社団法人日本包装技術協会、「包装の環境配慮 JIS Z 0130 規格群の開発」(2016)：

[https://www.jpi.or.jp/report/data/report160310\\_jp.pdf](https://www.jpi.or.jp/report/data/report160310_jp.pdf)

<sup>50</sup> 一般財団法人日本品質保証機構 (JQA)、「ISO 14001 (環境)」：[https://www.jqa.jp/service\\_list/management/service/iso14001/](https://www.jqa.jp/service_list/management/service/iso14001/)

<sup>51</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>52</sup> 味の素株式会社、「アニマルウェルフェアに関するグループポリシー」(2021)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/animal\\_welfare\\_policy.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/animal_welfare_policy.html)

<sup>53</sup> 味の素株式会社、「サプライヤー取引に関するグループポリシー」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/suppliers\\_policy.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/suppliers_policy.html)

<sup>54</sup> 味の素は、事業や地球環境の変化に合わせて、毎年重点原材料の見直しを行っています。2021 年度時点では、パーム油、紙、サトウキビ、コーヒー豆、牛肉、大豆、カツオ、エビを重点原材料に指定しています。

<sup>55</sup> 味の素株式会社、「人権尊重に関するグループポリシー」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/human\\_rights\\_policy.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/human_rights_policy.html)

<sup>56</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>57</sup> 味の素株式会社、「人財に関するグループポリシー」(2018)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/human\\_resources\\_policy.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/human_resources_policy.html)

<sup>58</sup> 味の素株式会社、「サプライヤー取引に関するグループポリシー」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/suppliers\\_policy.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/suppliers_policy.html)

<sup>59</sup> 味の素株式会社、「品質に関するグループポリシー」(2017)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/quality\\_policies.html](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/activity/policy/quality_policies.html)

<sup>60</sup> 味の素株式会社、「サステナビリティデータブック 2022」(2022)：

[https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp\\_all%20\(4\).pdf](https://www.ajinomoto.co.jp/company/jp/ir/library/databook/main/00/teaserItems1/03/linkList/0/link/SDB2022jp_all%20(4).pdf)

<sup>61</sup> 同上

<sup>62</sup> 一般財団法人日本品質保証機構 (JQA)、「ISO 9001 (品質)」：[https://www.jqa.jp/service\\_list/management/service/iso9001/](https://www.jqa.jp/service_list/management/service/iso9001/)

<sup>63</sup> 厚生労働省、「HACCP (ハサップ)」：

上記に加えて、同社に関連する重大な環境又は社会的な論争が存在する証拠はサステナリティクスには認められませんでした。全体として、味の素は、事業から発生し得る環境及び社会的リスクを軽減するために優れた管理プログラムと方針を有すると、サステナリティクスは考えます。

## セクション 3 : SPTs によるインパクト

### 世界及び日本における持続可能なフードサプライチェーンの重要性

食料システムからの GHG 排出量は、世界の GHG 排出量の約 21~37%を占めると推定されています<sup>64</sup>。その内の 3 分の 2 は、土地利用と農業生産由来であり、残りの 3 分の 1 が食品サプライチェーン（食品加工、輸送、包装、小売等）と食品廃棄物を含む小売後のプロセスに起因するものです<sup>65</sup>。さらに、食品にかかるコールドチェーンでは、冷媒として、CO<sub>2</sub> の 1,000 倍以上の地球温暖化係数（GWP）を有するハイドロフルオロカーボン（HFC）が主に使用されています<sup>66</sup>。この食料コールドチェーンで使用される HFC は、全世界の HFC 使用量の約 20%を占めています<sup>67</sup>。オゾン層保護を目的とした環境条約であるモントリオール議定書においても、主に GWP がより低い自然冷媒への移行を通じて、2040 年代後半までに HFC の生産・消費量を 80-85%まで段階的に削減させることが各国間で合意されました<sup>68</sup>。

日本においても、2020 年度の GHG 総排出量 11.5 億トンのうち、農林水産業由来が 5,100 万トン（4.4%）、食品・飲料製造業由来が 1,900 万トン（1.7%）になります<sup>69 70</sup>。これらの業界におけるカーボンニュートラルの達成のみならず、将来に亘る持続可能かつ安定的な食糧供給のため、日本の農林水産省は、「みどりの食料システム戦略」と呼ばれるグリーン食料システム戦略を 2021 年に策定しました<sup>71</sup>。同戦略にて、農林水産省は、農林水産業における CO<sub>2</sub> 排出量を 2030 年度に約 1,484 万トン（2013 年度 1,659 万トン）まで削減させ、2050 年までには CO<sub>2</sub> 排出のネットゼロを目指す目標を掲げています<sup>72</sup>。さらに、農林水産省は、2030 年度までに、事業系食品ロスの半減（2000 年度比）、輸入原材料の持続可能な調達の達成率 100%などの食品産業における目標を策定しました<sup>73</sup>。

上記を踏まえ、サステナリティクスは、味の素がスコープ 1、2、3 における GHG 排出量削減に注力することは、グローバル及び日本の食品産業における環境フットプリント削減に大いに貢献し、パリ協定の目標達成に寄与することが期待されるという意見を表明します。

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/shokuhin/haccp/index.html#:~:text=HACCP%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%80%81%E9%A3%9F%E5%93%81%E7%AD%89%E8%A1%9B%E7%94%9F%E7%AE%A1%E7%90%86%E3%81%AE%E6%89%8B%E6%B3%95%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/shokuhin/haccp/index.html#:~:text=HACCP%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%80%81%E9%A3%9F%E5%93%81%E7%AD%89%E8%A1%9B%E7%94%9F%E7%AE%A1%E7%90%86%E3%81%AE%E6%89%8B%E6%B3%95%E3%81%A7%E3%81%99%E3%80%82)

<sup>64</sup> 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）、「Special Report on Climate Change and Land（英文）」（2019）：<https://www.ipcc.ch/srccl/>

<sup>65</sup> Our World in Data、「How much of global greenhouse gas emissions come from food?（英文）」（2019）：<https://ourworldindata.org/greenhouse-gas-emissions-food>

<sup>66</sup> 環境省（MoE）、「地球のために、ノンフロンという選択を - 自然冷媒 冷凍空調機器」（2008）：<https://www.env.go.jp/content/900448889.pdf>

<sup>67</sup> 国連環境計画（UNEP）、「Sustainable Cold Chain and Food Loss Reduction（英文）」（2019）：[https://ozone.unep.org/system/files/documents/MOP31-Sustainable-HL\\_Briefing\\_Note.pdf](https://ozone.unep.org/system/files/documents/MOP31-Sustainable-HL_Briefing_Note.pdf)

<sup>68</sup> 国連環境計画（UNEP）、「About Montreal Protocol（英文）」：<https://www.unep.org/ozonaction/who-we-are/about-montreal-protocol>

<sup>69</sup> 農林水産省（MAFF）、「農林水産省地球温暖化対策計画について」（2022）：

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/climate/taisaku/attach/pdf/top-24.pdf>

<sup>70</sup> 環境省（MoE）、「2020 年度（令和 2 年度）温室効果ガス排出量（確報値）について」：<https://www.env.go.jp/content/900445398.pdf>

<sup>71</sup> 農林水産省（MAFF）、「みどりの食料システム戦略」：<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/>

<sup>72</sup> 農林水産省（MAFF）、「農林水産省地球温暖化対策計画について」（2022）：

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/climate/taisaku/attach/pdf/top-24.pdf>

<sup>73</sup> 同上

## SDGs への貢献

持続可能な開発目標（SDGs）は、2015 年 9 月に国連総会によって採択された、持続可能な開発を実現するための 2030 年までの目標です。味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークに基づき発行される金融商品は、次の SDGs 目標達成に向けた推進に繋がるものです。

| KPI                       | SDG                    | SDG 目標                                                                                                        |
|---------------------------|------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率（％）  | 7. エネルギーをみんなに、そしてクリーンに | 7.2 2030 年までに、世界のエネルギーミックスにおける再生可能エネルギーの割合を大幅に拡大させる。<br><br>7.3 2030 年までに、世界全体のエネルギー効率の改善率を倍増させる。             |
| スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率（％） | 9. 産業と技術革新の基盤をつくろう     | 9.4 2030 年までに、資源利用効率の向上とクリーン技術および環境に配慮した技術・産業プロセスの導入拡大を通じたインフラ改良や産業改善により、持続可能性を向上させる。すべての国々は各国の能力に応じた取り組みを行う。 |

## 結論

味の素株式会社は、以下の SPTs の達成と連動する財務的特性（利率のステップアップ／ステップダウン、寄付、排出権の購入）を有するサステナビリティ・リンク・ボンドの発行及びサステナビリティ・リンク・ローンの借入を予定しています。

- (1) SPT 1：2030 年度までにスコープ 1・2（排出絶対量）を 50%削減（対 2018 年度）
- (2) SPT 2：2030 年度までにスコープ 3（排出量原単位）を 24%削減（対 2018 年度）

サステナリティクスは、KPI 1 及び KPI 2 について、（1）重要なサステナビリティ課題に対する味の素株式会社のパフォーマンスを直接的に測定するものであること、（2）合算値で適用対象範囲が広いこと、（3）明確かつ一貫した方法論を用いていること、（4）科学的根拠のある GHG 排出量削減軌道に対するベンチマークが可能であることから、Very Strong と評価します。

サステナリティクスは、SPT 1 については過去のパフォーマンス実績と整合し、同業他社の目標を上回り、SBTi の 1.5℃シナリオと整合していることから Highly Ambitious と評価します。また、SPT 2 については過去のパフォーマンス実績及び同業他社の目標をともに上回り、かつ SBTi の 2℃ より十分低いシナリオに整合していることから Ambitious と評価します。更に、サステナリティクスは、味の素株式会社のレポートング及び検証に係る約束は市場の期待に合致していると考えます。

上記を踏まえ、サステナリティクスは、味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークは、サステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020 及びサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023 の 5 つの要素と適合し、かつ将来における SPTs 達成は環境改善効果を有すると考えます。

## 参考資料 1：サステナビリティ・リンク・ボンド－外部機関レビューフォーム

### セクション 1. 基本情報

発行体の名称：味の素株式会社

サステナビリティ・リンク・ボンド ISIN コード：

発行前のセカンドパーティ・オピニオンを担当する外部レビュー機関名（セクション 2 及び 3）：サステイナリティクス

発行前のセカンドパーティ・オピニオンの完了日：2023 年 5 月 16 日

発行後の検証を担当する外部レビュー機関名（セクション 4）：

発行後の検証の完了日：

ボンド発行時の構造的特性：



ステップアップ型



償還額変動型

### セクション 2. 発行前レビュー

#### 2-1 レビューの範囲

レビューの範囲について、以下の項目を適宜使用／採用しています。

本レビューでは：

☒ 以下の全要素を評価（全体的レビュー） ☐ 以下の一部要素のみを評価（部分的レビュー）：

☒ 重要業績評価指標（KPIs）の選定

☒ 債券の特性

☒ サステナビリティ・パフォーマンス・ターゲット（SPTs）の設定

☒ レポーティング

☒ 検証

☒ SLBP との整合を確認しました。

#### 2-2 外部レビュー機関の役割

☒ セカンドパーティ・オピニオン

☐ 認証

☐ 検証

☐ スコアリング／レーティング

注：レビューが複数ある場合やレビュー機関が異なる場合は、レビュー毎に別々のフォームを使用して下さい。

### 2-3 レビューの要約及び／又はレビュー全文へのリンク（該当する場合）

味の素株式会社は、以下の SPTs の達成状況と連動する財務的特性を有するサステナビリティ・リンク・ボンドの発行及びサステナビリティ・リンク・ローンの借入を予定しています。

SPT 1：2030 年度までにスコープ 1・2（排出絶対量）を 50%削減（対 2018 年度）

SPT 2：2030 年度までにスコープ 3（排出量原単位）を 24%削減（対 2018 年度）

サステナビリティクスは、KPI 1（スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率（%））と KPI 2（スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率（%））は、それぞれ（1）味の素株式会社の事業に対するマテリアリティや関連性、（2）合算値で見た適用対象範囲の広さ、（3）外部により定義された明確かつ一貫した方法論の活用、（4）外部の脱炭素化の軌道に対するベンチマーク可能性、に基づき Very Strong と評価します。

サステナビリティクスは、SPTs は同社のサステナビリティ戦略と整合していると考えます。SPT 1 については、（1）同社の過去のパフォーマンス実績と同水準の継続的な改善が示されていること、（2）同業他社のパフォーマンスを上回っていること、（3）SBTi の 1.5°C シナリオに整合していることから、Highly Ambitious であると評価します。また、SPT 2 については、（1）同社の過去のパフォーマンス実績を上回っていること、（2）同業他社のパフォーマンスを上回っていること、（3）SBTi の 2°C より十分低いシナリオに整合していることから、Ambitious であると評価します。

更に、サステナビリティクスは、同社のレポートिंग及び検証に係る約束は市場の期待に合致していると考えます。

上記を踏まえ、サステナビリティクスは、味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークは、サステナビリティ・リンク・ボンド原則 2020 及びサステナビリティ・リンク・ローン原則 2023 の 5 つの要素と適合し、かつ将来における SPTs 達成は環境改善効果を有すると考えます。

## セクション 3. 発行前レビューの詳細

レビュー機関は、以下の情報を可能な限り詳細に提供し、コメント欄を使用してレビューの範囲を説明することが推奨されています。

### 3-1 重要業績評価指標（KPIs）の選定

セクションのコメント概要（該当する場合）：味の素株式会社サステナビリティ・リンク・ファイナンス・フレームワークは、（1）スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率及び（2）スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率の 2 つの KPIs を選定しています。サステナビリティクスは、重要性（マテリアリティ）及び関連性、適用対象範囲、外部により定義された明確かつ一貫した方法論、ベンチマークが可能であることを踏まえ、これらの KPIs を Very Strong と評価します。

#### 選定された KPIs の一覧：

- スコープ 1・2 の GHG 排出量削減率（%）
- スコープ 3 の GHG 排出量原単位削減率（%）

#### 定義、範囲、パラメーター

- |                                                          |                                             |
|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 選定された各 KPI に関する明確な定義 | <input checked="" type="checkbox"/> 明確な計測方法 |
| <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：               |                                             |

#### 選定された KPIs の関連性、頑健性、信頼性

- |                                                                                                   |                                                        |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 選定された KPIs は、発行体のサステナビリティ及びビジネス戦略にとって関連性があり、中核的かつ重要（マテリアル）である | <input checked="" type="checkbox"/> KPIs は、外部から検証可能である |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------|

- |                                                                     |                                                         |
|---------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> KPIs は、一貫した方法論に基づき測定又は定量化が可能である | <input checked="" type="checkbox"/> KPIs は、ベンチマークが可能である |
|                                                                     | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：              |

### 3-2 サステナビリティ・パフォーマンス・ターゲット（SPT）の設定

**セクションのコメント概要（該当する場合）：**サステナビリティクスは、設定されている SPTs が味の素株式会社のサステナビリティ戦略と整合していると考えます。さらに、サステナビリティクスは、過去のパフォーマンス実績、同業他社との比較、科学的根拠のある軌道との整合性を踏まえ、SPT 1 を Highly Ambitious、SPT 2 を Ambitious と評価します。

#### 根拠と野心度

- |                                                                        |                                                                      |
|------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> SPTs は、顕著な改善を表す                    | <input checked="" type="checkbox"/> 選定されたベンチマーク及びベースラインは、関連性及び信頼性がある |
| <input checked="" type="checkbox"/> SPTs は、発行体のサステナビリティ及びビジネス戦略と整合している | <input checked="" type="checkbox"/> SPTs は、予め定められた時間軸に基づいて決定されている    |
|                                                                        | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：                           |

#### ベンチマーク手法

- |                                                     |                                              |
|-----------------------------------------------------|----------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 発行体自身のパフォーマンス実績 | <input checked="" type="checkbox"/> 発行体の同業他社 |
| <input checked="" type="checkbox"/> 科学的根拠           | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：   |

#### その他の情報開示

- |                                                           |                                                              |
|-----------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 再計算や調整が行われる場合に関する説明   | <input checked="" type="checkbox"/> 発行体の SPTs 達成に向けた戦略に関する説明 |
| <input checked="" type="checkbox"/> SPTs 達成に影響し得る重要な要因の特定 | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：                   |

### 3-3 債券の特性

**セクションのコメント概要（該当する場合）：**味の素株式会社は、サステナビリティ・リンク・ボンド及びローンの財務的特性を、SPTs の達成状況に連動させます。財務的特性の調整としては、利率のステップアップ、寄付、排出権の購入があり、（1）目標達成状況を確認する日までに SPTs のいずれかが未達である場合、又は（2）関連するファイナンスについての法的書類で定められる形で適時に SPTs に対する KPI パフォーマンスの検証が提供及び開示されなかった場合、に実施されます。

#### 財務的インパクト：

- |                                                                |
|----------------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 利率の変動                      |
| <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：寄付、排出権の購入 |

#### 構造的特性：

- |                                            |
|--------------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）： |
|--------------------------------------------|

### 3-4 レポーティング

**セクションのコメント概要（該当する場合）：**味の素株式会社は、KPIsの進捗状況について年次で同社ウェブサイトにて報告することを約束しています。また、味の素株式会社は、KPIに影響し得るサステナビリティ戦略やアクションプランの実行状況における変化等の関連情報を開示することも約束しています。レポーティングに関する約束は、SLBP 及び SLLP に 適合しています。

#### 報告される情報：

- |                                                         |                                                                                                        |
|---------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 選定された KPIs のパフォーマンス | <input checked="" type="checkbox"/> 検証保証報告書                                                            |
| <input checked="" type="checkbox"/> SPTs の野心度           | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：SPT 達成に影響を与える可能性のある情報の提供（サステナビリティ戦略の策定や更新、アクションプランの策定や実施状況等） |

#### 頻度：

- |                                            |                              |
|--------------------------------------------|------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 毎年     | <input type="checkbox"/> 半年毎 |
| <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）： |                              |

#### 開示の方法

- |                                                                         |                                                                     |
|-------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 財務報告書に掲載                                       | <input type="checkbox"/> サステナビリティ・レポートに掲載                           |
| <input type="checkbox"/> 臨時報告書に掲載                                       | <input checked="" type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）：味の素株式会社のウェブサイト |
| <input type="checkbox"/> レポーティングは審査済み（「審査済み」の場合、どの部分が外部審査の対象かを明示して下さい）： |                                                                     |

参考情報へのリンク先の欄で報告書の名称と発行日を明記して下さい（該当する場合）

#### レポーティングに対する保証のレベル

- |                                           |                                |
|-------------------------------------------|--------------------------------|
| <input checked="" type="checkbox"/> 限定的保証 | <input type="checkbox"/> 合理的保証 |
| <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい） |                                |

参考情報へのリンク先（例えば、レビュー機関の審査手法、実績、発行体の参考文献などへのリンク）

## Section 4. 発行後の検証

**セクションのコメント概要（該当する場合）：**

**報告される情報：**

- |                                |                                            |
|--------------------------------|--------------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 限定的保証 | <input type="checkbox"/> 合理的保証             |
|                                | <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）： |

**頻度：**

- |                                            |                              |
|--------------------------------------------|------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 毎年                | <input type="checkbox"/> 半年毎 |
| <input type="checkbox"/> その他（具体的に記入して下さい）： |                              |

**重大な変更：**

- |                                   |                                    |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 対象範囲     | <input type="checkbox"/> KPI の測定方法 |
| <input type="checkbox"/> SPTs の設定 |                                    |

## 免責事項

### © Sustainalytics 2023 無断複写・複製・転載を禁ず

本書に包含又は反映されている情報、手法及び意見は、サステイナリティクス及び／又はその第三者供給者の所有物（以下、「第三者データ」）であり、サステイナリティクスが開示した形式及びフォーマットによる場合又は適切な引用及び表示が確保される場合のみ第三者へ提供されます。これらは、情報提供のみを目的として提供されており、（1）製品又はプロジェクトの保証となるものではなく、（2）投資助言、財務助言又は目論見書となるものではなく、（3）有価証券の売買、プロジェクトの選択又は何らかの種類の商取引の実施の提案又は表示と解釈してはならず、（4）発行体の財務業績、金融債務又は信用力の評価を表明するものではなく、（5）いかなる募集開示にも組み込まれておらず、組み込んではありません。

これらは、発行体から提供された情報に基づいたものですので、これらの商品性、完全性、正確性、最新性又は特定目的適合性は保証されていません。情報及びデータは、現状有姿にて提供されており、それらの作成及び公表日時点のサステイナリティクスの意見を反映しています。サステイナリティクスは、法律に明示的に要求されている場合を除き、いかなる方法であっても、本書に含まれた情報、データ又は意見の使用に起因する損害について一切責任を負いません。第三者の名称又は第三者データへの言及は、かかる第三者に所有権があることを適切に表示するためのものであり、その後援又は推奨を意味するものではありません。当社の第三者データ提供者のリスト及びこれら各者の利用規約は、当社のウェブサイトに掲載されています。詳しくは、<http://www.sustainalytics.com/legal-disclaimers> をご参照ください。

発行体は、自らが確約した内容の確実な遵守とその証明、履行及び監視について全責任を負います。

英語版と翻訳版との間に不一致が生じた場合は、英語版が優先されるものとします。

## サステナリティクス（モーニングスター・カンパニー）

サステナリティクスは、モーニングスター・カンパニーであり、ESG とコーポレート・ガバナンスに関する調査、評価及び分析を行う独立系機関であり、責任投資（RI）戦略の策定と実施について世界中の投資家をサポートしています。30 年以上の間、グローバルな投資家の進化するニーズに応える高品質かつ先進的なソリューションを提供し続けています。その上で、ESG 及びコーポレート・ガバナンスに関する情報及び評価を投資プロセスに組み込んでいる、数百に及ぶ世界の主要な資産運用会社や年金基金を支援しています。また、サステナリティクスは、数百に及ぶ企業や金融仲介業者と協働してサステナビリティに関連する方針、実務、資金調達の検討を支援しています。サステナリティクスは、世界 17 カ所にオフィスを構え、40 以上の産業グループにまたがる様々な分野の専門知識を持つ 500 人以上のアナリストを含む、1,500 人以上のスタッフを擁しています。

詳しくは、[www.sustainalytics.com](http://www.sustainalytics.com) をご参照ください。

又は、[contact@sustainalytics.com](mailto:contact@sustainalytics.com) にご連絡ください。

